

第2回ワークショップ記録

びわ湖大津歴史百科 第2回ワークショップ

「石山貝塚考 ―縄文・ヒトとびわ湖と生活と―」

講師：鈴木 康二（滋賀県文化財保護協会副主幹）

内容：講演／見学（石山貝塚の剥ぎ取りの観察と現地説明会）

日時：2016年10月8日（土） 13：30～16：30

場所：石山寺塔頭 明王院（〒520-0861 大津市石山寺1-1-1）／石山観光会館

【講演概要】

石山貝塚は今からおよそ7,500年前頃に形成され始めた可能性が高い、びわ湖のほとりに最初にできた縄文時代の貝塚です。この貝塚から出土した遺物には、セタシジミやタニシなどの貝殻や、ナマズやコイなどの魚骨、スッポンやハクチョウなど鳥獣類の骨が多数あり、びわ湖・瀬田川で得られた実に多様な幸を糧として、日々の生活を営んだ可能性が指摘できそうです。また石山貝塚では、炉が設けられたり、お墓が作られたりしていたことも判っています。石山貝塚というその「場所」を舞台に、当時の人々の生活の一端を垣間見ることができそうです。そこではどんな生活が営まれていたのでしょうか。今回は、びわ湖畔に貝塚が形成され始めた頃の縄文時代の生活・文化を、石山貝塚の様子を中心に、周辺の事例も参照しながら様々な側面から考えてみたいと思います。

【講師プロフィール】

鈴木康二（すずき こうじ）

（公財）滋賀県文化財保護協会副主幹。佛教大学非常勤講師。修士（文化史学：同志社大学）。専門は先史学（考古）・博物館学（博物館教育論）。

『総覧縄文土器』2008年、『さわって楽しむ博物館』2012年（いずれも共著）ほか。

最近では、びわ湖の縄文貝塚を題材に、縄文時代の人々の生活・文化とその継承、そしてヒトとびわ湖との関係性を読み解くために、縄文時代の道具、特に縄文土器や石器を中心に研究しています。

■ 挨拶（大津市浜大津・石山地区文化遺産活用実行委員会副会長、大本山石山寺座主：鷲尾遍隆）

このワークショップは平成28年度の文化庁文化芸術振興費補助金を頂きまして、大津市浜大津・石山地区文化遺産活用実行委員会が主催となり、文化遺産を活かした地域活性化事業を行っていくものでございます。

いつも三井寺さんには置いて行かれてばかりなのですが、今回は「一緒にやってやる」ということで（笑）、三井寺さんとうち（石山寺）で共同開催という形になりました。非常に喜んでおります。天台のなかでも三井寺さんは、うちと非常に関係が深い（石山寺は真言）。三井寺さんは、天智天皇様の御世に額を頂いておられるんですね。石山寺もその時代、天智天皇様の石切り場として使われました。39枚の大きな岩が切り出されまして、瀬田川、大和川を通過して飛鳥の川原寺・本堂の基礎

石として使われました。そういう関係で、三井さんとうちは天智天皇様のつながりがございます。また、義仲寺には松尾芭蕉のお墓がございますが、私共石山寺から拝みに行ったり、三井さんから拝みに行かれたりという形で、ずっと共同作業が行われております。今回、一緒に事業を行えますことを非常に喜んでおります。つたない説明でございましたが、私のあとは大変有効なお話をお聞きいただけたと思います。では先生、よろしく願い致します。

■ 講演（講師：鈴木康二）

僕は普段、滋賀県文化財保護協会というところで発掘調査をしています。なので真黒に日焼けしています。今は草津と近江八幡の二箇所が発掘調査をしていますが、実はその前は安土城考古博物館というところで学芸員をやっておりました。安土城考古博物館は、安土城や織田信長に関するものだけではなく、滋賀県の考古学的な成果を紹介する博物館としても建てられていますので、古墳時代・弥生時代・縄文時代などの展覧会も併せて行っております。僕はそこで4年間学芸員をやりましたが、3年目によく、展覧会のテーマ選定を任されることになりました。その時、僕が最初に選んだのが「石山貝塚を紹介する展覧会」でした。

今日これからお話ししていく石山貝塚は、実は、学史的にも、縄文時代の研究をしている考古学者のなかではすごく有名な由緒ある遺跡なんです。発掘調査というのは全国で年間1万3千件くらい行われていて、次々と新しい情報が出てきて古い情報は見向きされなくなってしまうんです。それでも「石山貝塚は注目に値するよ」ということで、僕はかつて安土城考古博物館で展覧会を企画しました。今日はそのときのご縁で、こうして皆さんの前でお話させて頂くことになりました。当時の展覧会のお話と、それ以降に出た新しい成果なんかも少し加えて、お話をさせて頂こうと思います。どうぞよろしくお願い致します。

----- 以下、スライドを使用しながらの講演 -----

はじめに

石山貝塚の話にいくまえに、沖縄の話をご紹介します。沖縄で、23,000年前くらいの貝で作った釣り針が出た、というBBCのニュース（2016年9月19日付）です。モクズガニをたくさん食べていた旧石器人の、そのカニの殻の中から釣り針が出てきたようです。注目してほしいのは、こういうモノが出てくると、23,000年くらい前の人が「貝殻を使った道具を作り、しかも海産物を対象に生業を営んでいた」ということの確証になるということです。これを今日のお話に引っかけると、とても興味深いことになっていきます。

またあとでも話しますが、世界全体で見ると4万年くらい前から色々な人が海の幸・貝・魚を食べたり活用したり、また貝殻のネックレスなんかも見つかっていますので、そう考えると沖縄の事例は「わあ、すげえ」ということでは無いんですけども、日本列島、アジアの中では比較的古い事例になりますし、今日のお話に関連しますのでご紹介させて頂きました。

そもそも「貝塚」って？

「そもそも貝塚って何ですか？」というところから順番にいきたいと思います。学校では小学校6年生くらいで習いますが、皆さんの記憶にもございますでしょうか。実は今もそうなんですけど、「貝塚」というものを教える時には「縄文時代のゴミ捨て場」という言い方をしています。僕もずっとその言葉を使ってきたのですが、最近、僕の中では「いや、そんな単純なものじゃないよね」という思いがあります。「じゃあどんな空間なんだ？」ということ、今日は皆さんに考えて頂きたいと思います。

今のところ日本で一番古い貝塚というのは、千葉県にある西之城貝塚だと言われています。ただ、この情報は2年くらい前のものなので、その間にもっと古いものが見つかるかも知れません、特に僕は今、発掘調査のセクションで毎日自分の現場を掘るのに必死になっていて、色んな情報にアンテナが届かなくなっていますごめんなさい。この西之城貝塚と同じくらい古いものが、神奈川県の夏島貝塚という有名な貝塚で、これは9,500年くらい前のものです。石山貝塚よりもちょっと古いかな、という時代のものです。

世界史的にも、貝塚の出現というものを考えられるだけの情報が揃ってきています。この4箇所（デンマーク、カナダ西部沿岸、アメリカ北東部沿岸、中国沿岸・日本列島）、だいたいこれくらいの緯度より高い所で、9,500～8,000年前頃に「貝塚」は一斉に出来ていきます。日本はこのなかでも一番南に位置しますので、恐らく世界で一番古い部類の貝塚になってくるだろうと思います。この時期、この緯度の辺りでは氷河が北へ北へと溶けていき、そこから海産物を利用し始めたのではないかと考えられているためです。ちなみに、この時期・中石器時代の「マグレモーゼ文化期」という言葉は、僕が参考にしている地理の藤岡謙二郎先生のご本から引用して使っています。

「貝塚」形成前夜・・・

日本の貝塚は、世界に先駆けて誕生したのかも知れない。その上で、滋賀県の話に入って行きたいと思います。

この写真は、「大津市粟津湖底遺跡」といって、つまり琵琶湖の底です。場所としては琵琶湖漕艇場のちょっと沖にあたります。鋼矢板と呼ばれる高さ10数mの鉄の板を、湖底に（エリアを囲むように）打ち込んでいって、中の水を抜いて、湖底を露わにします。僕が発掘調査院は、そこへ船で乗り付けて、階段をおりて、水を抜いた湖底地下にある大きな貝塚や昔の川の跡なんかを調査しています。この写真は昔の川の跡で、縄文時代早期といわれる9,500年くらい前——夏島貝塚より少し古い時代——の土器がメインで確認されています。もちろんこの時代はまだ貝塚は出来ていません。ですが、この川跡からは「クリ塚」が見つかっています。当時の人たちが栗をたくさん食べていたということが証明されています。それから、「栽培植物——自然には生えていなくて栽培して育てないと手に入らない植物」と呼ばれるササゲやヒョウタンなんかの種が、川跡を埋めていた土の中からもとまってお出土しています。また当時の栽培植物のセットが、世界に先駆けてこの川跡から見つかっていて、時タイギリスやフランス、カナダの研究者がこれを目当てに訪れます。

現時点では、粟津湖底遺跡のこの「川跡」からは動物・魚・貝などを食べていた明確な痕跡は見つかっておりません。琵琶湖が今より小さかった時代、湖畔で生活していたにもかかわらず、人々は琵琶湖の幸を食べていなかった可能性が指摘できる。ただし、これには反対意見もあります。たとえばアユは頭から食べますよね。骨ごと食べていたから当然遺跡からは出てこないだと。しかし、コイとかフナになると丸ごと食べたりはしないだろうから、その骨が出てきていいはずだけどまだ出てきていない。貝殻にしても、1個や2個は食べたかも知れないけど、100個200個という単位で食べていたら貝塚が形成されますから、やはりその可能性も低そうだなというわけです。つまり、これが貝塚形成前（9,500年前）の琵琶湖畔で生活していた縄文時代人の生業ということですよ。

びわ湖の縄文貝塚

その後、琵琶湖に貝塚が出来ていきます。「粟津湖底遺跡第1～3貝塚」「蛭谷貝塚」「石山貝塚」の3つが琵琶湖の縄文時代の貝塚です。それ以降はすごく小さなものがポツ、ポツと断片的につくられたのみで、基本的には作られなくなります。

粟津湖底遺跡には第1～3まで3つの貝塚があります。実は、第1、2貝塚は、潜水調査をやっただけでまだ発掘調査はし

ていません。第3貝塚だけは、ちょうどその場所が「船を通しやすくするために浚渫したい」——琵琶湖は底が浅いですから——ということで発掘調査をしました。船を通すために湖底を削ると、第3貝塚がまるまる消えてしまうということで、「この貝塚を根こそぎ持って帰りましょう」という計画になりました。パンを入れる箱、あるいは魚を入れるトロ箱みたいな箱23,000箱に、貝殻も含めて湖底の土を入れて持って帰りました。それを全部あらって、何がどれだけ入っているのかを調べました。さっきの自然流路（川跡）も注目すべき資料ですが、こちらの第3貝塚も「貝塚一個をまるごとあらって全部解析したよ」ということで、世界的に有名です。

それから、第1貝塚についてですが、ここから見つかっている土器などから考えると、実はこの第1貝塚が世界で最古かも知れない——夏島貝塚などよりも古い——。ただし、この第1貝塚がある湖底は水の流れて削れてくるんです、早く養生してあげないとそのうちになくなってしまいます。

「編年」といって、現在では、出てきた土器を時系列で並べられるようになってきています。「この土器が出土すれば、その遺跡は何年前のこの地域」というように、土器については時代順が判るモノサシが出来上がってきています。それに従って琵琶湖の貝塚を並べていくと、ほぼ隙間無くこの順番（第1→石山→蛭谷→第2→第3）で遺跡が移り変わっていくんですね。ですから、たぶん、同じ人たちかもしくは関係する人たち、なんらかの繋がりの有る人たちが順番に移って行ったんじゃないかと思えます。最初に「粟津湖底遺跡第1貝塚」に居て、次に「石山貝塚」。そしてその次に「蛭谷貝塚」——これは石山寺駅の前に在りますね——、そのあと「粟津湖底遺跡第2貝塚」実はこれが一番大きい貝塚で、淡水産の貝塚としては世界最大級といわれています。そして最後に「粟津湖底遺跡第3貝塚」。出土した土器を見ると、どうもこの順番に移り変わっている可能性が高いと言えます。最後の「第3貝塚」を形成して以降は、大きな貝塚は一切つくられなくなったのが琵琶湖の状態です。

蛭谷貝塚の話もちよびっとだけしておきます。石山寺駅の駐輪場の南、放水路を越えて歩道がキュウっと盛り上がっているところ、その下に貝層があります。この蛭谷貝塚は、石山貝塚が形成されなくなった後の土器形式が出てきて貝層を作っているんで、おそらく石山貝塚よりも新しいものだろうということです。

石山貝塚調査略史

いよいよ「石山貝塚」です。

この写真は、石山寺の駐車場です。実はこの駐車場の下に貝塚が眠っています。

石山貝塚は発見から75年が経ちます。1940年（昭和15）に、今の「アオヤギ」さんが在る辺りに当時在った喫茶店で、小野先生という方——当時は学生でした——が授業をサボって横になっていたとき——ご本人は違うと仰っているようですが——に、壁のほうを見ていたら白いモノがぼつぼつ入っていて「なんじゃこれ？」と思って掘ってみたら、貝が出た。「なんか貝塚みたいなんがあるぞ」ということで、色んな人にお知らせするわけです。で、さっき僕が言った藤岡先生が最初に掘りに行ってみたら、はっきりと貝塚だということが判ってくるんです（1941、42年）。その後も順番に調査がなされました。僕が把握できているものだけでも17回以上にのぼります。なかでも一番まとまっていた調査は1950年～54年にかけて3回ないし4回行われた、平安学園考古学クラブによるものです。このとき、今年亡くなられました平安高校の坪井清足先生という御大が発掘をされて、分かりやすく成果をコンパクトにまとめた報告書を作っておられるので、その後はその報告書が石山貝塚を知るバイブルになっています。また坪井先生は、実はここ石山寺で一度石山貝塚についての講演会もされています。

今の石山貝塚では、この写真のような貝層の壁（堆積した貝殻の層の断面）を見ることは出来ないんですが、平成元年くら

いに大津市がこの壁をコンクリートで擁壁しますということで、「剥ぎ取り」という作業を行いました。貝層の壁に直接糊を吹き付けて、ガーゼを貼って、糊を付けて、布でペリィッと剥がすんです。そうやって作った剥ぎ取りは、「滋賀大学教育学部の図書館」「大津市埋蔵文化財調査センター」、そして「石山観光協会」に寄贈されることになりました——石山観光協会のものは、本日このあとご覧いただけると思います——。この「剥ぎ取り」も、先ほどの17回以上の調査のひとつにあたります。

全調査の中で判ってきたことは、この表のように整理できます。左端の列の「貝塚の深さ」に対して、藤岡先生や坪井先生、小江慶雄先生——京都教育大学で学長をされていました——がそれぞれ掘られたときの調査成果なんかを整理して行って、尚且つ学史を踏まえて、土器の出土状況も載せています。一番新しい層からは「石山式土器」、一番古い層からは押型文土器の「高山寺式土器」というのが出ていて、この貝塚全体が1,000年くらいかけて形成された可能性があるかと判ってきています。

石山貝塚の内容「食材？」

石山貝塚出土の貝類（貝殻）としては、セタシジミ、ナガタニシ、イボニシ、ハイガイなどがあります。

セタシジミは、現在でも瀬田川で採れるんですね。僕らがよくスーパーで見かけるシジミはだいたいマシジミなので、小さいイメージがあるかと思いますが、このセタシジミは大きさが3cmくらいあります。また、ナガタニシも見つかっていて、大きさは5cmくらいあります。このほかにも、マツカサガイやオトコタテボシなどの淡水産の貝——瀬田川なり琵琶湖で採れたであろう——も、数は少ないですが見つかっています。比率としてはシジミが圧倒的に多いですが。またそれ以外にも、イボニシやハイガイは見つかっていますが、実はこれは琵琶湖では採れずに「海」で採れる貝なんです。何故それが石山貝塚から出るのか。それはおそらく、「土器をつくる道具」として彼らが持ち込んだためだろうと考えられます。いずれの発掘調査でも一定量出土していますから、結構な頻度で誰かが土器作りに捨ててきたか、あるいは入手してきたのだらうと思われる。

魚類（魚骨）も出ています。たとえばナマズの骨。これはでっかい骨で「ビワコオオナマズとちゃうか？」と色んな人が言っています。それからフナ。フナはあんまり大きいのが出てこない。フナの骨自体、残り難いと言われてはいますが、残ることは残りますので食べていけば判ります。次の写真は、コイの「咽頭骨」といって顎の骨なんですけど、これはコイの骨の中では残りやすく、しかも一匹のコイに左右一対しかありませんから、これを数えると何匹のコイを食べたかが判る。それからギギですね。こういうものも石山貝塚の貝塚を丁寧にあらっていくと出てきます。

それから、彼らはきっと動物も食べています。この写真はスッポンです。スッポンの手の骨、そして甲羅。それからシカとかイノシシも当然出てきます。でもシカやイノシシの骨はほとんど粉々に砕かれて出てきます。おそらく中の髄も食べていたんだらうと思います。あと、彼らはハクチョウも結構な頻度で食べているようです。出土した鳥の骨のほとんどはハクチョウでした。ということは、ハクチョウが石山貝塚周辺で生息していた、と考えるのが自然です。またハクチョウは特定の植物しか食べないので、当時の石山貝塚周辺にはそのような水草が生え、湿地帯のような環境になっていたであろうと指摘できます。

貝塚からは実際にこのような貝殻や骨が出てきていますが、学者というのは面倒くさい生き物なので、「出てきたからといって、彼らは本当に食べたんだらうか？」と考えます。で、実はちょっとずつ調べ始めています。石山貝塚についてはサンプルが1個しかないのでもう少し成果を待って頂きたいんですけども、さきほどの「粟津湖底遺跡」の自然流路（川跡）から出てきた——つまり、まだあまり琵琶湖の幸を食べていなかった人たちが使っていた——土器については、その内側にこびりついた「おこげ」の炭素・窒素同位体比を分析した結果が出ています。彼らは、自生しているクリ・ドングリなどの「C3植

物」と呼ばれるもの、あるいはそれらを食べているシカ・イノシシなどを料理していた可能性が高いことが判りました。本当はもうちょっと魚の反応が出てもいいかなと思っていましたが、「おこげ」の分析からは出ませんでした。一方で、「石山貝塚」の「おこげ」の分析結果は——これはまだサンプルが一つだけですが——グラフを見てみると「C3植物」と「海産資」の間に一点、反応が出ています。二つの中間に点があるということは、C3植物も海産資（水産物）もどちらも食べていたということが指摘できます。これは「貝塚」だからやっぱりそうなるわな、という話になっていきそうです。まだ一例だけなのではっきりしたことは言えないのですが、これは実は最新の研究成果のひとつです。

最近はまだもうひとつ、土器そのものを削って土器の中に溶け込んでいる脂肪を分析するという研究が始まっています。それで見ると、「自然流路」の土器からは、水棲生物——魚、スッポン、亀など——が火を受けたときに見られる脂肪酸が顕著に出ているようです。さきほど、「おこげ」からは水棲生物の反応は出なかったと話しましたが、「脂肪分析」からはその反応が見られるようです。自然流路近くに住んでいた人々（約9,500年前）は琵琶湖の幸を食べたのか食べなかったのか、もう少し類例が増えないとどちらに転ぶかわかりませんが、もしかするとドングリなどを食べつつ、同じ鍋（土器）で琵琶湖産の貝や魚もコトコト煮ていたのかも知れません。

チョットヨコミチ。。

ここでちょっとヨコミチへ逸れます。土器の「おこげ」からどれくらいのことが判ってくるか、という話です。石山貝塚からはきちんと原形が判かる土器がいくつか出ているのですが、昔の研究では、残念ながら中をキレイに洗ってしまって「おこげ」なんかも洗い落としてしまっていたんです。今は「おこげが色んな情報を持っている」と分かっていますから、「おこげ」をできるだけ落とさないように丁寧に処理しています。なので、石山貝塚には実は「おこげ」が付いている土器はあんまり無いんです。

この写真は、富山県小竹貝塚——石山貝塚より少し時代が新しい——から出てきた土器です。この中から、「おこげ」がしっかり残っていて形・時期がはっきり分かる土器を5個体だけ選んで分析をしてもらいました。ただこの分析、1個で5万円とか10万円とかするんですよ。僕はちょうどそういう研究機関で働いている人と一緒にやっていたので、その人のご好意で5個だけ分析してもらうことが出来ました。で、分析は「貝塚の下から出てきた土器」と「貝塚の中から出てきた土器」のおこげを見てみました。すると、貝塚を形成する以前、つまり「貝塚の下から出てきた土器」は「海産物」により近いデータを示し、「貝塚の中から出てきた土器」は水産系ではなくて「C植物、草食動物」のデータが出たんです。つまり、逆転しているんです。貝塚を形成している人たちなのに海産物をあまり食べていなかった、そして貝塚を形成していない頃の人たちのほうが海産物を食べていた、ということが分析結果として出てきました。

「これはどうやって理解しましょう？」ということで、実は今ちょっと問題になっていますが。

僕が小竹貝塚で分析をやった理由は、実はここで70体ほどの「人骨」も出てきているからです。お墓が見つかっているわけです。で、同じようにこの70体ほどの人骨も同位体分析が行われています。その結果として、どうも、当時の人たちは「だんだんと海産資源に頼らない生活をしていく」ようなんですね。「貝塚が出来ているのに」ですよ。貝塚を作っているのに海産資源に頼らない生活をしていっているのではないかと、ということが指摘されつつあるのです。ただし、その一方で「こいつ鮭しか食ってないな」という骨も実際にあるんですよ。そういう人たちの存在が、「貝塚」を考える上でどういう風に影響を与えるのか、実はまだよく判りませんが、「彼らの生活とそこへ形成される貝塚とは必ずしも一致しない」ということは、石山貝塚を考える上でも重要な材料になるかも知れません。

石山貝塚からも人骨が出ています。彼らが魚を食べていたのかどうか、食べていたとしたらどういう痕跡が出てくる可能性があるのか。昭和20年代～30年代の研究ではそういった細かい分析は不可能で、形質学的な人骨の分類しかされていません。ですが、石山貝塚にはその当時の豊富な調査資料が揃っています。現在の目線でもう一度細かな分析を行うべき、見直す価値のある貝塚であると思っています。

石山貝塚の内容「道具」

この写真は、石山貝塚出土の「骨角器」と「貝製品」です。実物は大阪市歴史博物館の常設展で飾ってありますので、皆さん是非ご覧下さい。石山貝塚からは、このような「貝輪」が沢山出ています。関東には貝塚がたくさんありますが、このように貝輪が沢山出るのは3,500年くらい前の貝塚ですから、「この貝輪が出たのは滋賀で、7,000年くらい前の貝塚だよ」と言うと非常に驚かれます。それくらい珍しいことなんです。それからこれは石器。これは骨角器で、シカの角を使った土掘具ですね。土器も色んな形のもが出ていて、実物は大阪市歴史博物館と京都の平安高校考古学資料室に飾ってあります。(写真右の)この土器については、坪井先生も思い入れがあったらしく、絵葉書にされています。さきほど、「海」で採れた貝(ハイガイなど)を説明しましたが、この土器はそういった貝を使って表面をきれいに撫でられているのがはっきりと分かる土器なんです。こういった道具が石山貝塚から一緒に出てきていますので、これらを分析することで当時の人たちが文化的な活動としてどのようなことをしていたかが判ります。平安高校の報告書が作られた当時というのは、分析することよりもむしろ「時間軸のモノサシを整備する」ということに重きが置かれていたので、これらの土器たちを時系列に並べるということが優先されました。今後は土器それぞれの関係性、たとえば「ハイガイを具体的に使っていたのはどの土器で、それはどの時期で、どうやって使っているか」そういうことを調べていけば、あのハイガイをわざわざ海から取り寄せた人たちの思いというのも分かってくるのではないかと、個人的には考えています。

石山貝塚からはこの他にも色んなものが見つかっています。この写真は、石組みの「炉」です。今でいう台所のようなもので、ここで火を焚いていたと思われます。1,000年掛けて形成された貝層の中から、所々に、10基以上が見つかっています。「炉」の下からは、炭化したスギの実なんかも出てきていますが、坪井先生は「燃料にしたんだろう」とお考えです。確かに、キャンプや野焼きをするときなんか、スギやヒノキの実が入った枝を入れるとパチパチパチと油で燃え上がるんですね。当時の人たちも同じように考えたのかも知れません。スギの実は脂っこいので、たぶん食べるためでは無かったと思われます。

炉が出てくる周りから、同じように「お墓」も出てきます。今のところ4基(4体)が出ていて、大人が3体、子供(幼児)が1体です。大人3体は現在大阪市立大学の医学部で管理されています。で、僕が安土城考古博物館にいたときに石山貝塚の展示会をやりたいと思った一番の理由というのも、石山貝塚の頃——8,000～7,000年前——の人々が、「子供に対してどんな思いを持っていたのか」を解き明かしたかったからなんです。実は、この子(幼児の遺骨)は、ヤカドツノガイという貝のピースを首飾りのようにして巻いています。子供の骨にこのような装飾品が付けられている例はほぼ無いんです、しかもそれが縄文時代早期のものとなると全国でもこれが一番古いくらいです。僕が気になっているのは、「この子が特別だった」のか、それとも当時の子供は「みんな特別だった」のか、ということ。それが知りたくてこの子(遺骨)の保管場所を探し始めたのが、展示会開催のきっかけであり、今日に至るまで石山貝塚を根掘り葉掘り考えるようになったきっかけなのです。ですが、この子は今も見つかっていません。大阪市立大学の学生が観察したという卒業論文は見つかっていて「平安高校で計測をした」と書かれていましたが、今もずっと探し続けていますが見つかっていません。僕は諦めていないので、絶対に見つけます。

昭和58年に作成された「剥ぎ取り」を観察すると・・・

さきほど説明しました「剥ぎ取り」ですが、これを丁寧に観察すると「貝が焼けている面」があったり「粉々になった貝が入っている面」というのが見えます。石山観光協会にあるものは、残念ながら「焼貝面」は見当たらなかったんですけど、そこを人が歩いたであろう「破碎貝層」は何箇所か見つけられたので、後で皆さんにも見ていただこうかなと思います。

この講演の最初、学校では「貝塚＝ゴミ捨て場」と教わりますが「そんな単純なものではない」、ということを行いましたよね。そして貝塚の中には「お墓」があって、キッチンのような「炉」もあった。ご飯を食べたり生活をするようなところにゴミを捨てていた、といわれてもあまりピンと来ませんよね。ゴミは家の中から出しますよね。で、ゴミはゴミとして捨てるでしょ。そうすると、彼らにとっても「ゴミの中で生活している」という感覚は無かったんじゃないかと思うんです。貝殻や動物の骨、割れた土器、それと同じようにそこに火床が在ってお墓が在って、日常的にその空間の中で作業・生活をしているんです、たぶん。やはり「貝塚」は「ゴミ」捨て場ではないように思えます。

首飾りの幼児の遺骨について（詳細）

講演時間がもうちょっとあるので、さっきの子供のことを丁寧に話します。

大人の遺骨は3体ともほぼ全身が残っているんですが、子供は——当時の日誌を丁寧に見ていくと——頭の骨の一部と手の骨・足の骨というような一番硬いところの骨が残っている、という書き方がされています。他の骨はあまり残っていないかも知れない。そして、屈葬に近い体育座りのような格好で埋葬されていた可能性が高いようです。

この遺骨以外に、もうちょっと痕跡がないかと僕が探しているものが「子供たちが遺したモノ」です。たとえば、土器・石器などの考古資料のなかに「子供の手が作ったとしか考えられないモノ」が見つけれないか。これが出てきたら、それはそれで「子供の生活の証」がそこにあると指摘できますよね。ですから、迷子の遺骨を探すのと同時に、未報告の土器やなんかを全点あらって「小さい手が作った土器がないかな」と探しています。

ミニチュア土器

考古資料の中には「ミニチュア土器」と呼ばれる小さい土器があります。写真は、岐阜県芦戸遺跡（縄文時代前期）から出てきたミニチュア土器です。この「ミニチュア土器」は、実は、いつから作られ始めたのかよく判っていないんですが、「子供のおもちゃ」や「お祭りに使った道具」であろうと今のところは言われています。ですが、僕は「ちょっと違うんじゃないかな」と思い始めています。

次の写真は、現在のエチオピアのとある民族です。お母さんが土器を作っている横で、同じ形の小さい土器を子供たちが作っているんです。こういうのを見ていると、ミニチュア土器も「子供が横で土器作りを練習していたときのもの」ではないかと思うんです。これが僕の最近の研究テーマですけれども、たとえば縄文時代には、1万年間くらい縄文土器ってものを作り続けるわけですよ——色々な形のもの——でも、技術的には「継承」されていくわけです。親から子へ、祖父母から孫へ、という技術の伝承がないと伝わらないですよ。それから、この写真のエチオピアの子たちは、6～7歳になると自分で作った土器を自分で売りに行くんですよ。客がお金を置いて持って行こうとすると、「そんな値段じゃやだ」と言ってきちんと喧嘩もするらしい。こういう事を6～7歳の子がするという事を考えたうえで、この子たちが土器作りを練習する、その瞬間にどういうものが出来るのかを見てみたいなあと思っています。

次の写真は、弥生時代・滋賀県小津浜遺跡のミニチュア土器です。クチュクチュと作られた小さいものと、ちょっと大人

の土器に近づいたもの、この2者に分けられそうだなと思っています。粘土遊びを始めた直後の手が小さい子供が作ったものと、訓練を経て手も大きくなってから少し精巧に作られたもの。実は、幼児教育をやっている先生たちの実験データによると、どうも5～6歳くらいからこういうこと（土器作りの練習）が出来る脳の構造に成ってくるみたいです。

石山貝塚の時期というのは、ミニチュア土器を作ったのか作っていないのかがよく判らない、と言われていました。ですが、見つけたんです。これはね、本邦初公開ですよ。この写真、石山貝塚出土のミニチュア土器です、2cmくらいで、大人の指は絶対入らない小さい小さい土器です。底はすごく丁寧で作ってあって、口のところは欠けちゃっています。1個だけ見つけました。ただ、念のため言っておくと、まだ考えなければいけないことがあります。次の写真、これも石山貝塚から出たもので、土器の「底」です。この時期の土器の底は、平らなものは勿論ですが、「乳頭状」と呼ばれるものもあります。この乳頭状の底の形状（3cmくらい）と、さきのミニチュア土器の形状は似ています。実際、このミニチュア土器のような底部も在り得るんです。ですが、僕がこの土器を「ミニチュア」と判断した理由は、「器壁がすごく薄くて、ここから上に伸びる可能性が低そうだ（つまり普通の土器の底部には成り得ない）」ということです。もう少し類例を集めてきちんと決めたいなと思っていますが、今のところ「これはミニチュアの可能性が高い」と思っています。こういう土器作りを練習する人物が居て、さっきの「行方不明の幼児（遺骨）」とも結びついていけば良いなあと思っています。

「石山貝塚」を考える ～結びにかえて～

縄文時代の早期～前期くらい——ちょうど粟津貝塚～石山貝塚——この時期に日本で貝塚が積極的に営まれた、と僕はいま考えています。縄文時代中期・後期になると関東でもいっぱい大規模貝塚が出てくるんですけど、この貝塚と前期の貝塚とは恐らく性格が違うんじゃないかと個人的には思っています。まだ「なにが違う」と正確には答えられませんが、石山貝塚などは「生活に根付いている」、中期以降の大規模なものは「商品・商売のにおいがする」そんな気がします。貝塚出土物を丁寧に調査し、「貝塚の出現」から生業形態がどういふふうに変ったのか、もう一度見直してみたいと思っています。

今のところ、琵琶湖の水産資源を利用し始めたことを知るためには、「石山貝塚」が一番古くて確実です。石山貝塚は、現代のわれわれにつながる歴史として、琵琶湖とヒトとの関わりを知ることでできる大事な大事な貝塚です。石山貝塚が縄文人の「どんな暮らし」を「どのように支えていた」のか、がもっと詳細に判ること、琵琶湖とわれわれの関わりを考えるうえでの基点になるのではないかと考えています。

質疑・応答

Q：粟津湖底遺跡の「自然流路」とは何ですか？ 貝塚があるということは、昔そこは陸だったのですか？

A：粟津湖底遺跡は基本、「貝塚が形成されているところは昔陸だった」と考えたほうが良いと思います。ただ、粟津湖底遺跡第3貝塚は、「水打ち際」みたいな場所だったのではと言われていました。その理由として、一つは、この貝殻は全部二枚ずつに剥がれているんです。もう一つは、この貝層から出てくる土器が、下層ほど新しく上層ほど古いんです。天地が逆になっている可能性がある、ということ。普通は下に古いもの、上に新しいものが溜まっていきますが、ここではもしかすると、水際の水の流れが貝層をさらって（天地を逆転させて）再堆積させた可能性がある。貝殻がひっついたままではなく剥がれているのも、貝殻自体が動いたからではないかと考えられるためです。で、自然流路は、おそらく堆積を見るとそこは陸だったと言えます。琵琶湖が今みたいな形をしていたわけでは無い（陸地と複雑な境を形成していたかも知れない）ということも考えなければいけないし、第3貝塚の形成は5,000年程前で自然流路は9,500年程前なので、両者は近くに在っても5,000年くら

いの時間的な隔たりがあります。だからそんな単純な話ではないんですね。

それから、水性堆積ではない第1、2貝塚に関してはそこが陸化していた可能性が高いといえます。第3貝塚は、陸化していたかも知れないけれど何かの拍子に水際になるような所に堆積した可能性が高い。一応、今の時点で判るのはそんな感じなんです。

Q：縄文土器の加工にハイガイなど海の貝が用いられたとのことですが、どういうふうな交易手段が採られたのでしょうか？

A：静岡・神奈川・茨城県でも、ハイガイやサルボウガイなどを使った土器が出るんですね。実は、太平洋側には僕らが「石山式」と呼んでいるのとそっくりな土器が点々と出ているんです。土器自体が動いていた（交易されていた）のか、土器を作っている人が動いていたのか、よくは判らないのですが、仮に、土器を作る人が動いていたとすると材料・道具を持って移動している可能性がありますよね。どうやって交易したというよりも、その人が持って来たということがひとつ指摘できる。で、もう一つはね、石山貝塚から出ている縄文早期の人骨（大人3人分）、その脛の骨がすごく変形しているんです。医学の先生と確認を行ったうえでの想像ですが、その人骨は舟を漕ぐ姿勢をずっとしていた人で、そのために脛周りの筋肉が発達して骨が変形したのではと考えます。彼らはきっと、舟に乗っていたんです。縄文時代早期の骨というのは——そんなに類例があるわけではありませんが——同じ変形をしている確率が高いようです。だから彼らはたぶん、舟に乗って海沿いを回遊していた人たちだったと指摘できます。そういう人たちが何らかの理由で琵琶湖の畔へ上がってきた、と考えるのが一番自然ではないかなと思います。

舟で水際を移動していた人たちが、各地で貝殻を使った土器作りを続けた結果、そのエリア一帯に貝殻の模様のついた土器が出るようになった。実はこれと同じことが日本海側でも起きています。そして琵琶湖・石山貝塚の土器というのは、日本海側からの情報と太平洋側からの情報を併せもった土器なのです。ですから、交易にしろ人の移動にしろ、陸路ではなく海路で潮に乗って動いた可能性が高いということです。

Q：石山貝塚のような現象は、琵琶湖だけではなく他の大きな湖の周りでも起きているのでしょうか？

A：結論から言うと、判りません。それは、今のところ石山貝塚のような良好な事例がほかの地域には無いからです。

長野県・曾根湖底遺跡というところでは、遺構が明確に残っているわけではなく、縄文時代草創期くらいの「道具」だけが大量に出ています。そういうものを丁寧に寄せ集めても動物の骨・魚の骨がそれに伴うものかどうか判らないんです。貝塚のように「この場所が、当時の人たちが何らかの目的で貝を置いたところだ」と判れば、「土器・石器・動物の骨が出てきた」ということとも結びつき、「じゃあこれとこれをセットで、当時の人々が使っていたら」と考えられます。ですが、曾根のように遺構を伴わず、湖底から道具だけパラパラと出てくるのは「特定」がしにくいんですね。僕の知る限りでは、石山貝塚のように「当時、こんなモノをこんなふうに使っていた可能性があるよ」と指摘できる明確な資料は、淡水産においては他に無いんです。

海水産の貝塚に関しては、佐賀県・東名遺跡という縄文時代早期のでっかい貝塚が見つかっています。ここでは織物や編み物——僕らの常識を凌駕するほどの知識・技術力を持った人たちの遺物——がたくさん見つかっています。同じように、千葉県でも縄文時代早期後半の大きな貝塚が見つかっていて、今まさに調査が行われているところです。ようやく、比較対象になる貝塚が見つかってきているという段階なのです。

今ある資料で、頑張ることができるだけ紐解いていこうとしている、それが今日のお話の内容でした。ありがとうございました。